

明石短大 鵜野富美子

1. 被服構成における縫製は近年素材の多様化に伴いその技術の高度化が要求されるようになった。布の厚さが縫製技術の優劣に関係があることに着眼し、従来ショールカラーの表衿、裏衿の縫合では木綿織物の場合外まわりで0.2cm程度ひかえることがおこなわれているが材質によっては折かえり線のゆとり分を表衿に加味する必要があると考えた。そこでゆとり分をパターン上に展開し、裏衿、表衿を構成して合じるしを打ち製作実験をしてよい結果が得られた。

2. 実験材料①厚さのことなる木綿、化繊織物、毛織物、10種。芯地として不織布、麻芯、実験項目①布のズレに関する測定②パターン製作実験③裏衿と表衿同一のもの④表衿に外まわりのひかえ分を加えたもの⑤表衿に外まわりのひかえ分と折山線のゆとり分を加えたものをパターンに展開しその効果を見る。

3. 折かえりのゆとり分すなわち t (布の厚さ) π をパターンに展開して製作した結果、他の二種にくらべて衿の落着がよい、しかし厚さが少ないもの (0.2mm~0.4mm程度) には影響が少ないが0.5mm以上の材質には外まわりのかえり分のゆとりが必要である。素材の剛軟度、伸び、剪断変形などの影響も考えられるが特殊な材質以外は実際の製作にあたってはあまり考慮しなくてもよいのではないかと考えられる。